

主体性の育成を基盤とした学級集団づくり ～生徒指導・特別活動・社会科の授業実践を通して～

南さつま市立益山小学校

教諭 南 雅也

目 次

I	はじめに	2
II	研究主題	2
III	研究主題設定の理由	2
1	「主体性の育成を基盤とした学級集団づくり」	
2	「生徒指導・特別活動・社会科の授業実践を通して」	
3	児童（学級）の実態	
IV	研究の仮説と指導の工夫	2
V	研究の実際	
1	社会科における実践	3
2	【仮説1】に基づく実践	
(1)	課題に対する予想と探究的な活動（調べ学習）	4
(2)	自分の考えを交流するためのペア活動やグループ活動の設定	4
(3)	主体性を支えるICT活用	
ア	ロイロノートの活用	5
イ	「K a h o o t !」の活用	5
ウ	シンキングツールの活用	5
エ	マイゴールチャレンジ	6
(4)	体力アップ！チャレンジかごしまへの取組	6
3	【仮説2】に基づく実践	
(1)	生徒指導における実践	
ア	ポジティブ行動マトリクス	7
イ	学校楽しいーとの活用	8
(2)	特別活動における実践	
ア	話し合い活動（学級会）	8
イ	委員会活動や係活動	9
ウ	キャリアパスポートの活用	9
VI	成果と課題	10
VII	おわりに	10

【引用・参考文献】

- 『小学校学習指導要領 解説 総則編』平成29年 文部科学省
- 『小学校学習指導要領 解説 社会編』平成29年 文部科学省
- 『生徒指導提要』令和4年 文部科学省
- 『学校規模ポジティブ行動支援(SWPBS)とは何か?』平成2年 日本行動分析学会
- 『学校楽しいーと活用リーフレット』鹿児島県総合教育センター

I はじめに

近年、社会の急速な変化に伴い、学校教育においては、知識や技能の習得だけでなく、児童一人一人が主体的に考え、判断し、行動する力の育成が求められている。特に小学校高学年では、自我の芽生えや人間関係の広がりにより、学級集団の在り方が児童の学校生活や学習意欲に大きな影響を及ぼす。

本学級においても、友達の意見に流されたり、自分の考えを十分に表現できなかつたりする児童の姿が見られた。

そこで、児童が自ら考え、行動し、仲間と協力しながら学級をつくっていくことができるよう、「主体性の育成」を学級経営の基盤に据えた取組を推進することとした。本研究では、教科指導、生徒指導、特別活動の実践を通して、主体性を育む学級集団づくりの在り方について明らかにしたい。

II 研究主題

主体性の育成を基盤とした学級集団づくり
～生徒指導・特別活動・社会科の授業実践を通して～

III 研究主題設定の理由

1 「主体性の育成を基盤とした学級集団づくり」

鹿児島県教育委員会が示す「学びの羅針盤」では、「学習者主体の授業」の必要性が強調されている。主体性とは、自ら課題を見だし、考え、判断し、行動しようとする態度であると捉える。主体性が育まれることで、児童は学習や学校生活に意欲的に関わり、自分の役割を自覚しながら集団の一員として行動するようになる考えた。

本学級の児童は、真面目に取り組む一方で、指示を待つ姿勢が強く、自分の考えを積極的に発信することに苦手意識をもつ児童が多かった。そのため、教師が整えた枠の中で活動するのではなく、児童自身が考え、選択し、決定する場を意図的に設定する必要があると考えた。

主体性を育成することを学級経営の土台とすることで、児童同士が互いの考えを認め合い、協力しながら課題を解決しようとする学級集団の形成につながると考え、本主題を設定した。

2 「生徒指導・特別活動・社会科の授業実践を通して」

主体性は、特定の場面だけで育成されるものではなく、日常の学校生活や学習活動の積み重ねの中で育まれるものである。そこで、本研究では、生徒指導、特別活動、教科指導の三つの側面から主体性の育成を図ることとした。

3 児童(学級)の実態

〔第6学年 16人〕

主体性に関する質問	4	3	2	1
相手が理解しやすいように工夫しながら、自分の考えや気持ちを伝えようとしていますか。	3人	10人	3人	0人
分からないことやもっと知りたいことがある時、自分から進んで資料や情報を収集したり、だれかに質問をしたりしていますか。	1人	7人	8人	0人
学ぶことや働くことの意義について考えたり、今学校で学んでいることと自分の将来とのつながりを考えたりしていますか。	2人	10人	3人	1人
4いつもしている 3ときどきしている 2あまりしていない 1ほとんどしていない				

「分からないことやもっと知りたいことがある時、自分から進んで資料や情報を収集したり、だれかに質問をしたりしていますか。」という質問に対して、8人の児童があまりしていないと回答しており、学ぶことへの意義や意欲を感じていない児童がいる。

IV 研究の仮説と指導の工夫

【仮説1】

児童が主体的に考える授業づくりを工夫することで、自ら学びに向かい、学習に意欲的に取り組む学級集団の形成につながるのではないかと。

《指導の工夫》

- (1) 毎授業の導入において既習事項を確認し，課題に対する予想を立てる活動を行う。
- (2) 探究的な活動（調べ学習）を授業の中で取り入れる。
- (3) 自分の考えを交流するためのペア活動やグループ活動を設定する。

【仮説2】

児童が見通しをもって行動し，振り返る活動を充実させることで，自分の行動や学びを自覚的に捉える力が育成され，互いを認め合いながら主体的に関わる学級集団の形成につながるのではないかと。

《指導の工夫》

- (1) 基本的な学習の進め方の確立（「わでかいも」での振り返り）
- (2) ポジティブ行動マトリクスの実践と反省
- (3) キャリアパスポートの活用
- (4) ICTを，学びや行動を振り返り，自分の成長を可視化するための手段として活用

V 研究の実際

1 社会科における実践

- (1) 単元名：「震災復興の願いを実現する政治」（社会6年 東京書籍）
- (2) 目標：災害が起きた場合の国・県・市の緊急対応について調べ，理解することができる。
- (3) 本時案（2／6）

過程	主な学習活動	時間	指導上の留意点
見通す・つかむ	1 前時に学習したことを確認する。 震災の被害からどんな人たちが対応したのか。 ・消防 ・自衛隊 ・内閣 ・その他	3	○ 学習問題と単元構造図を確認し，見通しをもつことができるようにする。 ④ 前時に話し合った資料 ⑤ 復興に向けて様々な人や取組が協力していることを理解できる。 【キャリアプランニング能力】
	2 学習問題を確認する。 被災した人々の願いは，だれの，どのような働きによって実現されたのだろうか。	3	
調べる・深める	3 災害対策本部の写真を提示する。	3	○ 写真資料をもとに，前時の予想から出てきた消防士・自衛隊などの服装について触れ，話し合いが行われていることに気づかせる。 ④ 災害対策本部の写真 ⑤ 地方公共団体や国の政治の働きに関心を持ち，意欲的に調べることができる。
	4 めあてを立てる。 震災直後に，市や県，国はどのような取り組みを行ったのだろうか。		
まとめる・生かす	5 自分で調べる。（付箋への書き込み） ○ 震災直後の市の取組について調べる。 ・ 地震の直後に災害対策本部を設けた。 ・ 避難した住民のための水，食料，仮設トイレなどを県や他の市に手配を要請した。 ○ 震災直後の県の取組について調べる。 ・ 被害状況をつかむための情報収集を行った。 ・ 自衛隊に災害時の派遣要請を行った。 ・ 災害救助法を適用して，必要な物資を手配した。 ○ 震災直後の国の取組について調べる。 ・ 災害対策基本法にもとづき，緊急災害対策本部を設けた。 ・ 自衛隊の派遣人数を増やした。 ・ 他国へ救助要請をした。	15	○ 調べる方法を児童が選択できるようにする。 ○ グループで話し合いを行う際には，自分が調べたことをもとに意見を出し合う。意見を出し合う際には，付箋を活用して1枚の紙にまとめるようにする。 ⑤ 気づいたことや分かったことを個人・グループでまとめ，発表できる。 【人間関係形成・社会形成能力】 ○ 全体で共有する際は，各グループで話し合った紙と教科書から「災害から人々を助ける政治の働き」の関係図を黒板に掲示し，国，県，市が法律に基づいて，連携，協力して緊急事態に対応していることを捉えさせる。 ⑤ 災害復旧の取組は，地方公共団体や国の政治の働きによるものであることを理解し，表現できる。【課題対応能力】 ○ 振り返りはタブレット端末で行う。
	6 グループで共有する。（付箋を並べ替える）	10	
	7 全体で共有する。（関係図を使って確認する）	5	
	8 まとめる。 災害対策本部の設置や救助活動が行われ，避難所の設置やボランティアによる炊き出しなど市や県，国が連携・協力できる体制づくりが行われている。	3	
	9 振り返る。（わでかいも）	3	

2 【仮説1】に基づく実践

主体性を育成するためには、児童が「分かった」「できた」と感じるだけでなく、自ら課題に向かい、考え、判断する学習過程を重視することが大切であると考えた。そこで、社会科の授業を中心に、課題解決的な学習を取り入れ、児童が主体的に学習に取り組むことができる授業づくりを行った。

(1) 課題に対する予想と探究的な活動（調べ学習）

毎授業の導入では、既習事項を確認した上で、学習課題を提示し、児童一人一人が課題に対する予想を立てる活動を行った。予想を立てることで、学習の見通しをもたせ、自分なりの考えをもって学習に取り組んだ。

その後、資料や教科書、ICT機器を活用した調べ学習を取り入れ、児童が自ら必要な情報を選択しながら探究的に学習を進めた。調べ学習では、調べる内容や方法を児童に委ねる場面を意図的に設定し、教師は必要に応じて助言を行うにとどめた。

その結果、児童は「何を調べればよいか」「どの資料を使うか」を自分で考えるようになり、学習課題に対して主体的に向き合う姿が見られた。

(2) 自分の考えを交流するためのペア活動やグループ活動の設定

調べ学習や個人思考の時間には、児童が自分の考えを付箋に書き出す活動を取り入れた。短い言葉で考えを表現させることで、自分の考えを整理するとともに、後の交流活動につなげた。

その後、ペアやグループで付箋を持ち寄り、1枚の大きな紙に貼りながら考えを共有した。その際、事前に示した観点ごとに付箋を分類していくことで、互いの考えの共通点や相違点に気付くことができるようにした。児童は友達の意見を読み取りながら、自分の考えと比べたり、新たな視点に気付いたりする様子が見られた。

さらに、グループでまとめた付箋シートには、赤ペンで補足の言葉を書き加えたり、大切だと考えた部分にマーカーを引いたりする姿が見られた。こうした活動を通して、児童は自分たちの話し合いの過程を振り返りながら、考えを深めていった。



【グループで作成した付箋シートの例】

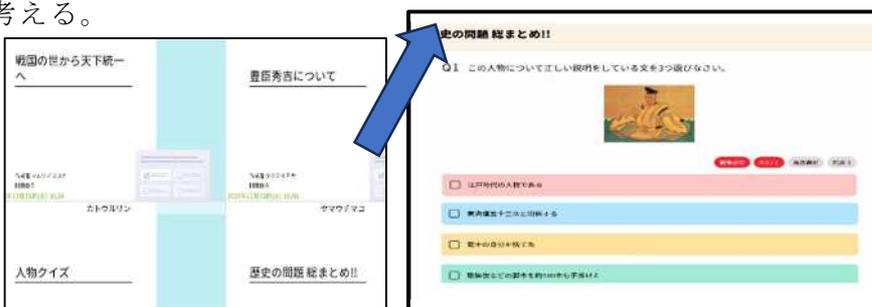
このような交流活動の取組で、授業以外の場面においても、児童同士が自発的に関わりながら学習に取り組む姿が見られるようになった。

テスト前には、休み時間中に近くの児童同士で問題を出し合い、互いに解き方や考え方を説明し合う様子が見られた。また、ロイロノートを活用して、歴史に関するクイズを作成し、友達に出題するなど、自分の学びを共有しようとする姿も見られた。

これらの姿から、ペア活動やグループ活動を通して培われた「自分の考えを伝え、友達の考えを取り入れる」という学習の在り方が、児童の中に定着しつつあることがうかがえる。児童は、友達と関わりながら学ぶことのよさを実感し、主体的に学習に向かう態度を高めていったと考える。



【テスト前に問題を出し合う様子】



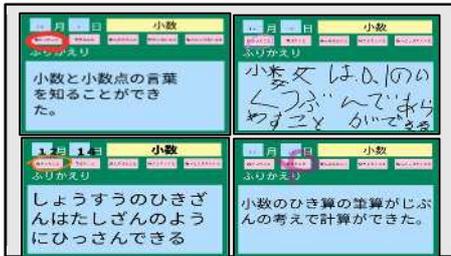
【ロイロノートで児童が作成したクイズ例】

(3) 主体性を支えるICT活用

児童が主体的に学習に取り組むためには、自分の学びを振り返り、次の学習や生活につなげていくことが重要であると考え、ICTをそのための手段として活用した。

ア ロイロノートの活用

ロイロノートで学習の振り返りシートを作成し、「わでかいも」(わかったこと、できたこと、考えたこと、生かしたいこと、もっと知りたいこと)の視点で振り返りを行った。この取組は、昨年度、担任していた3年生の学級でも実践してきたものであるが、今年度は6年生という発達段階を踏まえ、より具体的に自分の学びを言語化することを意識させた。



【R6年度3年生 算数での振り返り】



【R7年度6年生 社会での振り返り】

その結果、学習内容を振り返るだけでなく、「今後どのように生かしたいか」、「さらに深めたいことは何か」といった視点で振り返る児童が増えた。特に、「生かしたい」、「もっと知りたい」と答える児童が多く見られ、学習を次につなげようとする主体的な姿勢が育まれていることがうかがえた。

イ 「Kahoot!」の活用

「Kahoot!」を活用することで、学習内容を楽しみながら確認できた。個人やチームで同じ問題を解き直す活動を行った。個人で解いた際に間違えた問題や迷った問題について、友達と考え方を交流することで、誤りに気づき、理解を深めることができた。また、この活動を通して、知識の定着だけでなく、学んだことを生かそうとする意欲が高まっていった。



【学級で取り組んだ単元例】

ウ シンキングツールの活用

シンキングツールを用いることで事象の関係や因果関係を整理する活動を行った。使用するシンキングツールについては、教師が一律に指定するのではなく、児童が学習内容や自分の考えに合ったものを選択できるようにした。ツールの特徴を踏まえながら、「どのように整理すると考えやすいか」を児童自身が判断することで、思考の仕方に対する主体的な選択を促した。また、既存のシンキングツールでは自分の考えを十分に表せないと判断した児童の中には、自分のイメージに合う形でノートに書き込んで整理する姿も見られた。これらの姿から、自分に合った方法で思考を深めようとしている様子が見られた。



【児童のシンキングツール使用例】

エ マイゴールチャレンジ

キュビナを中心に、児童は自分で学習することを選択して予習や復習を行った。ダッシュボード機能を活用することで、学級全体の理解状況やつまづきの傾向、教科ごとの取組状況などを把握することができ、指導の重点化や声掛けに生かした。特に、学習内容の偏りが見られた際には、個別に助言を行った。



【キュビナのダッシュボード機能】

MEXCBTで毎週配信される「今週の1問」については、毎週水曜日に学級全体で取り組む時間を設定した。短時間で取り組める問題に継続して向き合うことで、学習習慣の定着を図るとともに、「今週もやってみよう」と意欲的に学習に取り組む児童の姿が見られた。さらに、解答後には結果を確認し、自分の理解を振り返ることで、次の学習につなげようとする態度が育まれていった。

このように、ICTを活用して児童の思考や学びを可視化し、振り返りを充実させることで、児童は自分の学びに自信をもち、仲間と関わりながら主体的に学習に取り組む姿を見せるようになった。

(4) 体力アップ！チャレンジかごしまの取組

本校は体力テストの結果も良く、日頃から運動に親しみ、運動好きな児童が多いという実態がある。そうした実態を生かし、昨年度から「体力アップ！チャレンジかごしま」の取組の一つである「長縄エイトマン」について、全学年で取り組めるよう、目標や回数を記入できる掲示板を作成し、学校全体で継続的に実践してきた。



【のぼしてコロコロに取り組む様子】

今年度は、学校全体としての唯一の課題である柔軟性の向上を図るため、「のぼしてころころ」を全学年で継続的に実施した。活動に当たっては、ただ取り組むだけでなく、各学年で目標を立て、自分たちの成長を意識できるようにした。

6年生では、「長縄エイトマンで300回を跳べるようになりたい」、「のぼしてころころでは平均15回以上を目指したい」といった具体的な目標を児童自身が掲げて取り組んだ。活動の中では、「前より回数が伸びた」「声を掛け合うと跳びやすい」といった前向きな声が多く聞かれ、休み時間にも自主的に練習する姿が見られた。結果として、1学期から2学期にかけて、「長縄エイトマン」は、**264回→298回**、「のぼしてコロコロ」は、**平均8.5回→平均11回**となり、どちらも向上した。



【チャレンジかごしま掲示板】

このように、学校全体の取組の中で、学級として目標を設定し、継続して努力する経験を積み重ねることで、児童は主体的に活動に向き合い、仲間と協力しながら目標達成を目指す態度を育んでいった。

3 【仮説2】に基づく実践

(1) 生徒指導における実践

本校では、生徒指導の核としてSWPBS (School-Wide Positive Behavior Support) の手法を取り入れている。SWPBSとは、問題行動への対応を中心とするのではなく、児童が望ましい行動を身に付けられるよう、学校全体で共通理解のもとに支援していく生徒指導の考え方である。

ア ポジティブ行動マトリクス

学校生活の中で、児童が望ましい行動を具体的にイメージし、自分で行動を選択できるようにするため、ポジティブ行動マトリクスを活用している。本校では、「きまりを守ろう」、「自分も友達も大切にしよう」、「読書」の三つを柱とし、「授業中」、「掃除」、「休み時間」、「ろう下・あいさつ」といった生活場面ごとに、具体的な行動例を整理して示した。

このマトリクスは、禁止事項や注意点を示すものではなく、「どのように行動すればよいか」を肯定的な表現で示している点に特徴がある。児童は、日常生活の中で自分の行動を振り返る際に、「今の行動はマトリクスのどこに当てはまるか」、「次はどの行動を意識したいか」と考えることができ、行動の見通しをもつことにつながった。

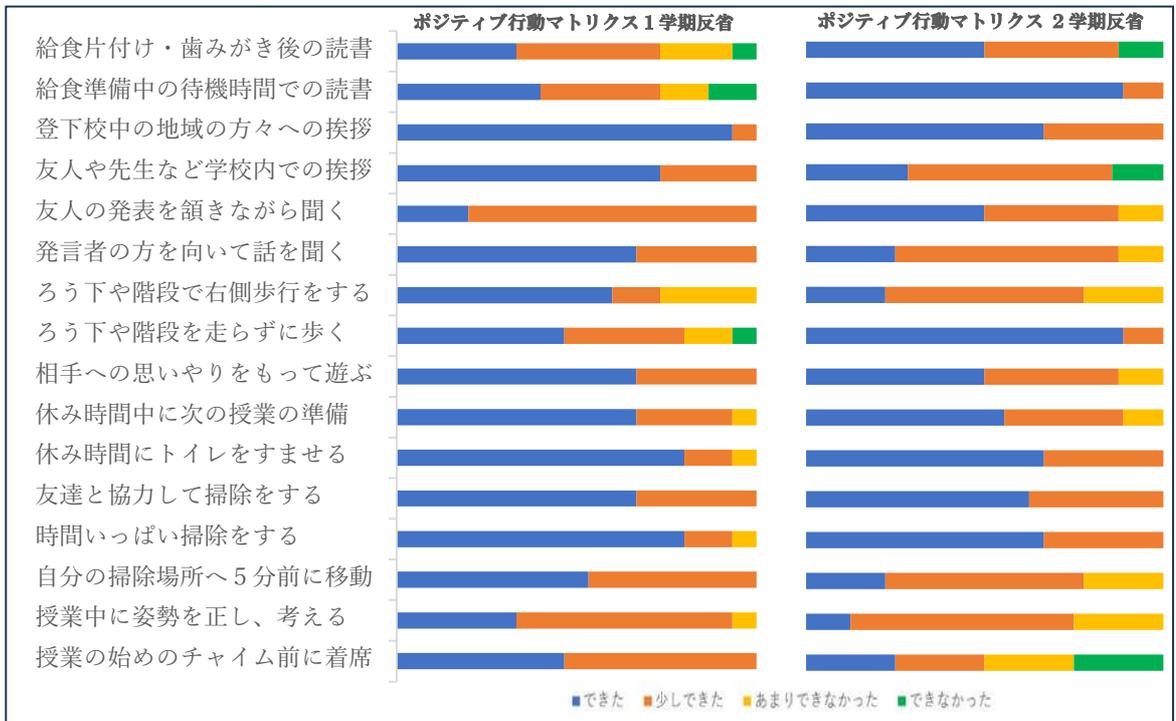
また、学級での話し合いや振り返りの場面では、ポジティブ行動マトリクスを基に、「できていた行動」、「これから意識したい行動」を確認した。注意や指示によって行動を正すのではなく、児童自身が行動を選択し、よりよい学級生活をつくろうとする姿が見られるようになった。

この取組を通して、児童は自分の行動を客観的に捉え、友達との関わり方や学級での過ごし方について主体的に考えるようになり、安心して過ごせる学級集団づくりにつながっていった。

ポジティブ行動マトリクス (R7 9月)

とくみ 取組	きまりを守ろう	自分も友達も大切にしよう	読書
授業中	<input type="checkbox"/> 始まりのチャイムが鳴る前にすわっておこう。 <input type="checkbox"/> 姿勢を正しく一生けんめい考えよう。	<input type="checkbox"/> 話をする人の方へ体を向けよう。 <input type="checkbox"/> うなずきながら発表をしっかりと聞こう。	・給食の準備が終わったら自分の席で静かに読書しよう。(歯みがき後) ・毎月二十三日は、「うちもといっしょに読書の日」です。お家の人といっしょに本を読みましょう。(図書バッグを必ず持つてくる)
掃除	<input type="checkbox"/> 自分の掃除場所に遅れずにいこう。(5分前の放送後すぐに移動) <input type="checkbox"/> 時間いっぱい働こう。	<input type="checkbox"/> 自分の仕事に一生けんめい取り組もう。 <input type="checkbox"/> 友達と協力してできることはないか考えよう。	
休み時間	<input type="checkbox"/> トイレをしっかりすまそう。 <input type="checkbox"/> 次の授業の教科書、ノート、鉛筆などを準備しよう。	<input type="checkbox"/> みんなにとって楽しい休み時間になるように、相手のことを考えて遊ぼう。 <input type="checkbox"/> トイレのスリッパをならべよう。	
ろう下・あいさつ	<input type="checkbox"/> ろうかや階段を走らないようにしよう。 <input type="checkbox"/> 右側通行を守って、歩こう。	<input type="checkbox"/> 学校の中で誰に対してもあいさつを大きな声で言おう。 <input type="checkbox"/> 登下校中や放課後、休みの日など学校の外でもあいさつをしよう。	

南さつま市立 益山小学校



【ポジティブ行動マトリクスの1学期の反省と2学期の反省の比較】

1学期と2学期のポジティブ行動マトリクスの振り返り結果を比較すると、多くの項目において「できた」、「少しできた」と回答する児童の割合が高まっていることが分かる。特に、「給食の準備や片付け」、「登下校時の行動」、「掃除への取組」など、日常的に繰り返される生活場面において、行動が安定してきている様子が見られた。

また、1学期には行動のばらつきが見られた項目についても、2学期には「少しできた」から「できた」へと意識が高まっており、児童が自分の行動を振り返りながら改善しようとしていることがうかがえた。これは、ポジティブ行動マトリクスを行動の基準として継続的に活用してきた成果であると考えられる。

一方で、「ろう下や階段の歩き方」、「授業中の姿勢や話の聞き方」など、一部の項目では「少しできた」、「あまりできなかった」と感じている児童が一定数見られた。これらの項目は、場面ごとの意識が途切れやすく、継続した声掛けや振り返りが必要であることが分かった。

今後は、ポジティブ行動マトリクスを提示して終わりにするのではなく、学級会や日常の振り返りの場面と結び付けながら、児童自身が課題を自覚し、改善策を考えられるようにしていく必要がある。また、できている行動を価値付けながら、小さな成長を積み重ねていく支援を続けていきたい。

イ 学校楽しいーとの活用

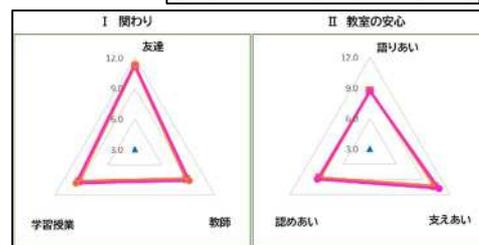
「学校楽しいーと」を活用することで、児童の学校生活に対する意識や学級の状態を客観的に把握することができた。今年度から Microsoft Forms を用いて集約できるようになったことで、全学年が結果を速やかに確認でき、学級経営や生徒指導に生かしやすくなった。

6年生においては、1回目よりも2回目の方が全体的に向上しており、学級の中で安心して過ごせるようになったことや、友達との関わりや学習への意欲が高まってきたことがうかがえた。

一方で、数値の変化だけで児童の状態を判断するのではなく、背景にある思いや理由を丁寧に捉えることが大切である。

今後は、「学校楽しいーと」の結果を学級会や日常の振り返りと関連付けながら、学級の状況を見つめ直し、よりよい学級づくりに主体的に関わっていけるような手立てを工夫していく必要がある。

I・II 関わり・教室の安心				
I 関わり				
観点	1回目	2回目	3回目	
1 友達との関わり	11.2	11.3	↑	
2 教師との関わり	8.8	9.1	↑	
3 学習・授業への関わり	9.3	9.6	↑	
II 教室の安心				
観点	1回目	2回目	3回目	
1 語りあい	8.7	8.7		
2 支えあい	10.3	10.8	↑	
3 認めあい	8.6	8.9	↑	



【6年生の楽しいーとの数値とグラフ】

(2) 特別活動における実践

ア 話し合い活動（学級会）

学級会を中心とした話し合い活動を通して、児童が学級の課題や願いを自分事として捉え、主体的に学級づくりに関わることができるようにした。話し合いの内容は、年度始めの学級目標や学級通信のタイトル決めにとどまらず、係活動の仕事内容の見直しや、卒業式での合唱曲の選定など、学級生活に関わる様々な事項について行ってきた。

6年生という発達段階もあり、児童はそれぞれが自分の意見をしっかりとをもって話し合いに参加し、理由を付けて考えを述べる姿が多く見られた。また、話し合っただけの決めたことを実際の行動につなげることを大切に、「決めて終わり」ではなく、「実践し、振り返る」ことを意識した学級会運営を行った。

学級目標は、話し合いを通して「MUGEN～可能性は無限大！自分を信じて仲間を信じて～」に決定した。この言葉には、「一人一人に無限の可能性があること」や「仲間と共に成長していきたい」という児童の思いが込められている。目標の作成に当たっては、文字のデザインを考えるだけでなく、「みんなそれぞれに良さがある」という考えから、自分の好きな色で手形をとり、カラフルな掲示物として仕上げた。これにより、学級目標が児童一人一人の存在と結び付いたものとなった。



【活動の様子】



【学級目標】

さらに、学級目標を形にしていく過程で、「学級のキャラクターがいたら面白いのではないか」という意見が児童から出され、「無限マン」が誕生した。無限マンは、児童自身がデザインし、学級の象徴として様々な場面で活用してきた。特に運動会の際には、無限マンをモチーフにしたお守りを作成し、親子種目の後に、これまでの感謝の気持ちを言葉にして保護者に手渡す場面が見られた。



【無限マン】

このような取組を通して、児童は話し合いによって決めたことを形にし、実際の行動や表現につなげる経験を積み重ねてきた。

イ 委員会活動や係活動

委員会活動では、児童会活動を身近に感じられるよう、児童玄関正面に児童会掲示板を設置した。掲示板には、児童会目標、各学年の学級目標、各委員会のメンバーや仕事内容、委員会からのお知らせを掲示し、日常的に児童の目に触れるようにした。



【児童会掲示板】

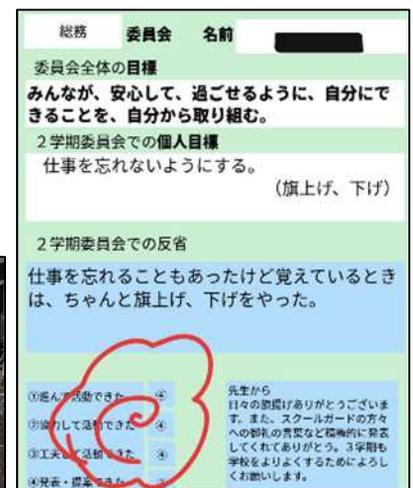
また、委員会活動の振り返りには、学期始めに立てた目標を基に自己評価ができる反省シートを活用した。「進んで活動できたか」、「協力して活動できたか」などの観点から振り返ることで、児童は自分の活動を具体的に捉え、次の活動に生かそうとする姿が見られた。これらの取組を通して、委員会活動に対する責任感や主体性の向上が図られた。

委員会活動や係活動で培った主体性は、校内のボランティア活動にも広がった。落ち葉を集める清掃ボランティアや、廊下歩行を意識づけるための中央線の張り直しなど、児童は自分たちで必要性を考え、積極的に活動に取り組んでいた。これらの取組は6年生にとどまらず、他学年の児童にも広がり、学校全体でよりよい環境をつくらうとする意識の高まりが見られた。



【廊下歩行を意識づけるための環境整備】

【朝のボランティア】



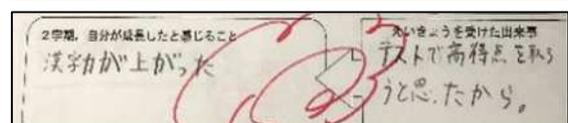
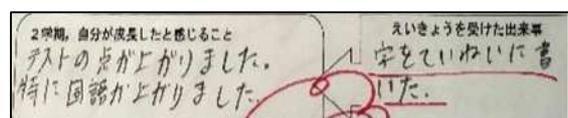
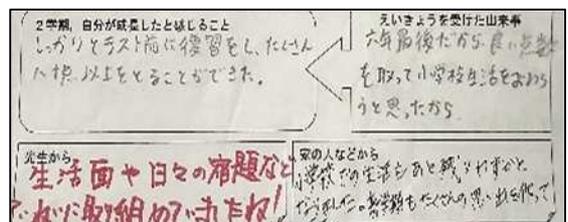
【委員会活動での反省】

ウ キャリアパスポートの活用

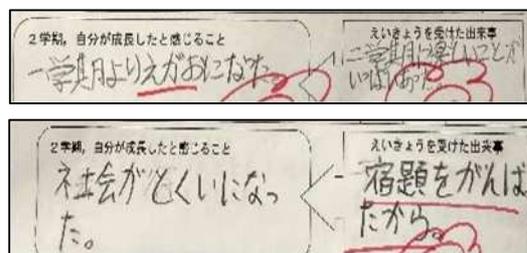
キャリアパスポートを活用し、学期ごとに自己評価や振り返りを行った。多くの児童が「社会科の成績が上がった」、「国語のテストの点数が伸びた」など、自身の学習の成果を実感している様子が見られた。

また、「復習をしっかりと行うようになった」、「宿題や学習に前向きに取り組めるようになった」といった記述も多く、学びに向かう姿勢の変容がうかがえた。

さらに、「笑顔が増えた」、「自信をもって生活できるようになった」といった自己の成長を捉える記述も見られ、キャリアパスポートを通して、自分の努力や成長を肯定的に振り返ることができていた。これらの取組は、学習意欲の向上だけでなく、自己肯定感を高め、主体的に学校生活を送ろうとする態度の育成につながったと考える。



また、学級PTAの場において、保護者から児童の成長についてのコメントを書き込む機会を設けた。そこでは、「家庭でも進んで学習に取り組むようになった」「自分から学校での出来事を話すようになった」といった声が多く聞かれた。学校での取組が家庭での姿にもつながっていることが確認でき、キャリアパスポートを通した振り返りが、児童自身だけでなく、保護者との成長の共有にも有効であることが分かった。



【児童が成長を感じたことの記入例】

VI 成果と課題（○：成果，●：課題）

【仮説1】

児童が主体的に考える授業づくりを工夫することで、自ら学びに向かい、学習に意欲的に取り組む学級集団の形成につながるのではないかと。

- 毎授業の導入で既習事項を確認し、課題に対する予想を立てる活動を継続したことで、児童は「何を学ぶのか」、「どのように考えればよいのか」という見通しをもって授業に臨むようになった。その結果、課題に対して自分の考えをもとうとする姿勢が定着し、学習への意欲が高まった。
- 探究的な活動を取り入れたことで、教科書だけでなく資料やICTを活用しながら、自ら調べ、考えを深める姿が見られるようになった。ペア活動やグループ活動を通して、自分の考えを伝えたり、友達の意見を聞いて考えを修正したりする姿も増え、学習を自分事として捉える児童が多くなった。これらの取組により、学びに向かう雰囲気をもった学級集団が形成されつつあることが確認できた。
- 交流活動においては、自分の考えを言葉で表現することに難しさを感じる児童もおり、発言の量や深さには個人差が見られた。今後は、発言だけでなく記述やICTを活用した表現など、多様な参加の形を保障することで、すべての児童が主体的に学習に関わることができる授業づくりを工夫していく必要がある。

【仮説2】

児童が見通しをもって行動し、振り返る活動を充実させることで、自分の行動や学びを自覚的に捉える力が育成され、互いを認め合いながら主体的に関わる学級集団の形成につながるのではないかと。

- 「わでかいも」を用いた振り返りを継続的に行ったことで、振り返りの内容が次第に具体的になり、自分の行動や学びを自覚的に捉える姿が見られた。
- ポジティブ行動マトリクスを活用した行動の振り返りを行うことで、児童は望ましい行動を意識しながら生活するようになり、互いのよさを認め合う雰囲気が学級に広がった。委員会活動や係活動、ボランティア活動においても、自分から役割を見つけて行動する姿が多く見られた。
- キャリアパスポートやICTを活用して成長を可視化したことで、学習面や生活面における成果を実感する児童が増えた。社会科や国語科の成績向上を実感する声や、「笑顔が増えた」と自己評価する記述も多く見られ、主体的に関わる学級集団の形成につながったと考える。
- 振り返りの質については、深く自己分析できる児童と、形式的な振り返りにとどまる児童との差が見られた。今後は、振り返りの視点をより明確に示すとともに、教師の価値付けやフィードバックを工夫し、振り返りを次の行動改善に繋げていく支援が必要である。

VII おわりに

本研究を通して、児童が主体的に「自分で考え、行動し、振り返る」経験を積み重ねることの大切さを改めて実感した。特に、最高学年である6年生にとって、任される経験や仲間と協力して課題を乗り越える経験は、大きな成長につながることを強く感じている。今後も日々の実践を大切にしながら、児童一人一人が自分の可能性を信じ、次のステージに向けて夢に向かって歩んでいけるよう、継続して指導・支援に取り組んでいきたい。